

8 【おとろし】

うららかな春の午後、村のこどもが一人殺されたことがありました。神社（じんじゃ）の境内（けいだい）で、死んでいたとのこと。頭が、われていたとのこと。われた頭から、脳味噌（のうみそ）が飛びでていたとのこと。その脳味噌を、無数の蟻と無数の蠅が、くっていたとのこと。小さな村なのに、ぼくはそのこどもの名前も顔も知りませんでした。そんなはずはないとおもいながら、なぜだか何も知らないことが、よけいにおそろしかったものです。

知らないこどもでも、助けられるものなら助けたかったと、心からおもいました。

村の大人たちは、こぞって、

「【おとろし】のたたりじゃ、【おとろし】に殺されたんじゃ」という。

【おとろし】という名前が、またおそろしい。

ぼくはさっそく、懐爺のところへ走りました。

「【おとろし】たあ、なんじゃ」

ぼくは息をきらせながら、ききました。

「【おとろし】は、神様を守る妖怪で、神社に住みつくおばけです。こどもなんか、神社でいたずらしたりすると、上からいっきに落ちてきて、殺してしまうんです」

懐爺は、身振り手振りですぐに答えてくれたが、またすぐきいてきました。

「もしかして、村のこどもが殺されたんじゃないでしょうね」

「そのもしかしてじゃ」

「さいきん、神社でいたずらするこどもが多いつてきいていましたから、わたしは心配していたんですよ」

「こどものいたずらくらい、かみさまならおおめにみろい」

ぼくは、自分の弁解（べんかい）もふくめて、いいました。

「そのとおりです。でも神様は、老若男女の差別（さべつ）をしません」

「ほんとにころされたんだか。やねのかわらとかが、あたまさ、おっこ

ちてきたんかも」

「それがそうだとしても、それも神様を守るために、【おとろし】がやったことなんです」

「かみさまも、ひとをころすんか」

ぼくは疑問をぶつけました。

「ひとを生かすも殺すも、神様のおぼしめしですよ」

ぼくは納得した、気になりました。

「およそおぼけというものは、偉大なものです。きわめてすぐれた能力のある人間を、よくおぼけというでしょう」

「いういう。かいじいなんかも、おぼけいわれとる」

「それは能力があるからではなく、ただ気味悪いからです」

懐爺は、わざとうなだれてみせました。

心も、うなだれているはずです。

ぼくは、いうんじゃなかったとおもいました。

それで自分なりに、ごまかしました。

ぼくはききます。

「かみさまとおぼけは、どちらがうんじゃ」

「神様はおぼけじゃないけど、おぼけには神様のおぼけもいますよ。神様になりそこなったら、おぼけになるということかもしれません。【はんぴどん】などはその代表で、いわば半人前の神様でしょうか」

「はんにんまえじゃ、たよりないのう」

「そのたよりなさが、またいいのかもしれないよ。神様というとおそれおおいけれども、半人前なら、なんとなく親しみもあっておつきあいしやすいものです」

「つきあいたくないのう」

ぼくは、本心ではないことをいいました。

「金ちゃんは優等生（ゆうとうせい）だから、そんなこというのです。金ちゃんも大人になって挫折でもしたら、【はんぴどん】の癒（いや）しの魅力がわかるはずです」

「ぎせつ、たあ、なんじゃ」

ぼくはききました。

「挫折ですか。自分の心の中に突然変異（とつぜんへんい）で発生した

おばけでしょうか」

懐爺は、むずかしいことをいいました。

ぼくには、まったくわからない。

(十年後に挫折するまでは)